

令和2年度 学校評価総括表 伊丹市立笹原中学校

学校教育目標		予測不能な未来を自立して生き抜く知・徳・体バランスのとれた人間力ある生徒の育成						
重点目標		(1) 受容と共感に基づいた生徒理解を基盤に、規律ある学校生活のもと、確かな学力を育む (2) 全教育課程を通して高い道徳性と人権意識を育み、保護者と地域との連携のもとで、ともに支え合う仲間づくりを行う						
項目	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者評価	
安全・安心な学校（総務部）	教育課程	・学校教育目標の実現に向け、全教員が学校運営に参画する。 ・学校の現状や生徒の実態を踏まえた教育課程を編成する。	・学校行事を充実させるため、事前学習や事後学習の時間を確保する。 ・「笹トレ」や7校時学習の実施により授業時数を確保するとともに、地域と連携した放課後補習や土曜学習等の実施により学力を保障する。	アンケート結果の「A」「B」評価の割合の合計が80%以上になる。	B	・新型コロナウイルス感染症の対策をしながら、校長の方針のもと教職員の共通理解を図り、学校教育目標の実現に取り組んだ。学校全体での行事ができない中ではあったが、各学年で取り組み学年行事を充実させることができた。その結果、学校へ行くのが楽しいとする生徒アンケートの「A」「B」評価が83.3%、保護者アンケートの「A」「B」評価が88.1%とどちらも前年度と同程度であり、目標を達成することができた。また、校長の教育方針は明確であるという、教員アンケートの結果は75.0%と前年度より2.6%増加している。今後も学校生活、学校行事等で生徒が達成感を持つように工夫をさらに進めるとともに、さらに向上を目指して、生徒の自主性や主体性を伸ばす取り組みを進めていく。	・「笹トレ」については、問題の改良、取り組み等に工夫を重ね今後も継続する。 ・学年を超えて教え合い、学び合うことで学びを確実なものにするともに、問題が解ける楽しさを味わいながら自尊感情を育てていく。 ・学校行事については、新型コロナウイルス感染症の対策をしながら、できることを実施し、生徒が達成感を得て、次の行事や翌年にへつなげる取り組みを行う。 ・行事への積極的な参加に関する生徒アンケートの「A」「B」評価が3.2%減少している。今年度は生徒が主体的に取り組む機会をつくるのが難しかったことが影響していると思われる。今後は、感染症対策を行いながら、できるだけ、達成感を味わえるような取り組みを増やしていく必要がある。	・学校長の方針が全教職員に今以上明確になることが必要である。80%以上ではなく、90%以上を目指してほしい。 ・コロナ禍で、学校行事が変更や延期、中止となった中で、先生方が様々な工夫をされた跡が評価に出ている。
	危機管理の徹底	・自転車交通安全教室や防災訓練を通して安全に生活する事や自分の命を自分で守ろうとする意識を高める取り組みを行う。 ・災害や犯罪から身を守るすべについて、具体的に学習する場を設ける。	・自転車交通安全教室を発達段階に応じて内容を吟味して実施する。 ・年2回の防災訓練に向けた事前学習の徹底を図り、防災意識の高揚を図る。 ・防災や安全に関する情報を随時活用し、実生活とのつながりを意識させるような学習を企画する。 ・インターネットの安全な利用法や情報モラルについては、生徒の実態を踏まえ、関係機関との協力のもと、適切な内容の講習会を実施する。 ・実態に即した防災マニュアルの見直しと作成を行う。	・アンケート結果において、「A」「B」評価の割合が80%以上になる。 ・年2回避難訓練を実施する。 ・講話や講習などを年3回以上実施する。	B	・全校生徒が集まって、講演会などを行うことはできなかった。しかし、交通安全や不審者などの内容に限定せず、自分(命)を大切にすることやコロナ対策やコロナ差別に触れて、生徒一人一人によりそって話を続けることができた。その結果、生徒のアンケートでは6.4ポイント下がってはいしたが、項目13の「自分を大切にすることや他人への思いやり」に関する項目では15ポイント上昇するという結果を得られた。 ・ウイルス対策やコロナ差別などにも触れつつ防災教育を行った結果、教職員アンケートでは項目4・5では肯定的意見は低下したが、項目6では3.2ポイント上昇した。 ・防災訓練や学習を行うことはできたが、一方で、地域との連携においては課題が残る。いざという時のために、地域と協力して防災に取り組めるようにしていく必要がある。	・前年度に提示した以下の改善策については、今年度行ってきた生徒へのきめ細やかな対応を続けつつ、万全なウイルス対策をしながら実施していきたい。 ・自転車交通安全教室を行うことで、自転車に関する知識を身につけさせる。 ・防災意識の高揚を図るために、防災訓練や防災学習の内容の充実を図る。また、防災学習については、授業の中で活用できる教材を整備していく。 ・防災や安全に関する情報を収集し、実生活とのつながりを意識させた学習を企画する。 ・防災学習や訓練に地域の方にも参加、協力してもらう。 ・防災マニュアルの徹底を教職員全体に通して行う。 ・生徒の実態を踏まえ、スマホの使い方やインターネットなどの安全な利用法や情報モラルについての講習会を関係機関の協力のもと実施する。	
学力の向上（教育・研究部）	評価・情報システム	・様々な方法で評価資料を収集し、生徒の学力や学習の達成度の評価を適切に行う。 ・デジタル機器を活用し、生徒の興味・関心を高め、意欲的に学習に取り組めるように教材を工夫し、わかりやすい授業に努める。	・生徒、保護者が納得できるような基準を設定し、シラバスで示す。また、評価資料を収集し、生徒の意欲を高める評価に努める。 ・ICTの活用を推進し、その状況が保護者に伝わるよう、授業参観等でアピールしていく。 ・さらなるICT化の推進を目指し、タブレット型端末の活用等を進めていく。	・アンケート結果において「A」「B」評価の割合が90%以上になる。 ・教職員のアンケート結果においては「A」「B」評価の割合が100%になる。	A	・アンケートの結果より、概ね教師は95.8%の結果から、評価資料の収集をしっかりと行うことができたと考えられる。その成果もあり、生徒、保護者共に90%以上という、概ね高い評価を得ることができている。 ・教職員の「適切な評価」「個人情報の管理」においては100%でなければならないと考えられるため、より一層の努力を必要としなければならない。 ・休校期間中に学習支援ソフトを用いて、学習や健康観察を行うなど、ICTの活用をした結果、90%以上の高い評価を得ている。	・生徒、保護者向けに新学習指導要領にのっとった、評価基準をしっかりと提示し、評価方法や評価資料の徹底をはかり、説明責任が果たせるようにする。 ・一人一台のタブレット端末を効果的に活用する方法を検討する。 ・教師のデジタル機器の活用率は高くなってきたので、生徒がデジタル機器を活用できるような取り組みを検討する。	・「特別支援教育の推進」の評価「C」には問題がある。この教育の基本は、一般の生徒にも適用される。サポートだけではいけない。 →「得意なものを伸ばす」指導を目指すことが必要である。各学年、他学年、他校の取組から学び、情報共有ができればいいですね。 ・特別支援教育の理解・研修は今後ますます必要かつ重要だと思います。 ・次年度へ向けた重点的な改善点としては、「教材の精選」があげられる。 1. 授業での説明を減少させ、生徒の活動の増加を検討する。 2. そのために、教科書の重要ポイントを教材研究(精選)により検討する。 (学習指導要領の点検:教えるべきポイントは何なのか) ・笹トレの評価が高いのは、この数年の生徒の達成感の表れだと感じる。 ・タブレットは手段であるので、目的化しないように、今後は授業のソフト面での質を上げてほしい。
	指導方法の工夫改善	・生徒の興味・関心を高め、意欲的に学習に取り組めるようにする。 ・教材や指導法などを工夫し、わかりやすい授業づくりに努める。 ・チーム学習・話し合い活動や発表を積極的に授業の中で取り入れ、学びの共同体づくりに努める。	・効果的なサクセスシートを全学年実施する。 ・効果的なめあてを検討するための研修会や強化週間を設定する。 ・コロナ渦の中、ICT機器を効果的に活用(スクールタクトなど)し、意見を共有しあえる環境づくりを図る。 ・「笹トレ」を活用し、教え合いの基盤を定着させる。また、各教科の授業の中で効果的に笹トレのノウハウを取り入れる。	・アンケート結果において「A」「B」評価の割合が90%以上になる。	B	・めあてに関するアンケート結果は肯定評価が90%を超えている。しかし、生徒のアンケートではA評価が85パーセントに対して、教員は66パーセントになっている。このことからめあての提示は行っているものの、教員自身が効果的にめあてを提示できていない状況にあると考えているという実態がうかがえる。 ・振り返り活動に関するアンケート結果では生徒の87パーセントが肯定的な評価をしている。しかし、A評価をつけた生徒は36パーセントと低いため、効果的な振り返り活動ができていないように思われる。 ・コロナ渦により、活動に制限があったが、話し合いの場で意見を言えたかという項目は肯定的評価が昨年度63パーセントであったが、今年度は67パーセントとわずかに向上している。ただし、依然として改善を要する数値となっている。	・めあてに関しては全教員で効果的なめあてとは何かを考える機会を設ける。また、現状めあてを1つ書くこととなっているが、プロジェクト型学習に向かうためのめあて(プロジェクト終了までかわらない)とその授業でのめあての2つを提示するようにする。 ・振り返りシートが教科によっては、感想を書くだけのものになってしまっているのが現状である。また、生徒にフィードバックができていない。各教科でサクセスシートや振り返りの仕方を再検討する必要がある。 ・コロナ渦の中で、制限があるが、できることや効果的だったことを教科を横断しながら共有していく必要がある。	
	家庭学習の充実	・各教科より進度や理解度に対応した課題を出すことで、家庭学習の習慣化および充実を図る。 ・授業内容の確認や学力向上の成果が見られる課題を作成する。	・家庭内で学習する環境に課題がある場合は、放課後学習や土曜学習などを通して、学校で学習時間を確保し、自主学習の習慣化を図る。 ・生徒が意欲的に取り組み、率先して提出しようと思える課題にするために、提出後の点検をスムーズに行い、次の学習への意欲が高められるような、励みになるコメントや間違いの訂正、疑問点への回答など個別の指導に努める。 ・単元テストの充実を図る。	・アンケート結果において、「A」「B」評価の割合が80%以上になる。	A	・生徒、保護者、教師の家庭学習に関するアンケート結果は肯定的評価が80%を超えている。 ・サクセスシートを取り入れている教科とそうでない教科があった。 ・各教科で週末課題や週間課題を設定したり、工夫されたノートを掲示したりするなどの取り組みが好評につながっていると考えられる。 ・教員のアンケート結果では、各教科や各学年で家庭学習の充実に取り組んでいる、という項目は肯定的評価が昨年より10%ほど上がっている。 ・家庭学習の習慣化について各家庭ごとに差が大きい実態と、宿題を家庭ではなく学校で取り組んでいる生徒たちが多いという実態がうかがえる。 ・1年生のプロ学や2年生のISTの取り組みによって、学習意欲の向上につながっている。	・高評価につながっている取り組みを今後も継続しておこなっていく。 ・サクセスシートについては、研推とリンクして効率のよい利活用の方法を徹底を図る。 ・家庭学習の習慣が身につけていない生徒を中心に、手帳を活用しながら保護者とも連携し、生徒の自主学習力の向上を図る。 ・学級担任と教科担任がこまめに連絡を取り合い、課題未提出者の把握につとめ、課題提出の徹底を図る。 ・各教科で課題を出す際に提出締切を明らかにするとともに、学級の連絡ボードを活用し、徹底を図る。生徒が課題を提出日締切当日に学校で慌てて取り組んでいる様子があれば声かけをし、事前に取り組むよう促す。 ・単元テストの位置づけを明確にする。	
	特別支援教育の推進	・特別支援学級だけでなく、通常学級の生徒に対しても個別の指導計画を作成し、適切なサポート体制を強化する。 ・特別支援教育推進委員会や学年会議などで生徒の情報を共有するとともに日常的に支援員の方とも連携をはかる。	・個別の指導計画の内容を全職員で共通理解し、日々の指導に生かせるように各学年に1部ファイルを作成する。 ・特別支援教育推進委員会であがった情報を学年の担当が学年会議などで学年職員に確実に伝えるようにする。 ・個々のケースにおいてうまくいった支援についての事例を集め共通理解する。 ・毎月の学年会議で、支援の必要な生徒の情報と配慮を把握して、常に変化する生徒の現状に合わせて対応できるようにする。 ・特別支援推進委員会で話し合われた生徒で、特に配慮や支援が必要な生徒は、毎月の職員会議で全職員に周知する。	・アンケート結果において、「A」「B」評価の割合が80%以上になる。	C	・サポートファイルと同じロッカーで管理し、全校で誰もが指導計画を把握できるようになった。 ・職員の個別の指導計画を念頭においた配慮、支援が不十分である。「皆がわかりやすい授業」を行うという指導の原点にかえった授業づくりを行う必要がある。 ・サポートファイルの作成が目的ではなく、情報に基づいた対応手立てが必要である。そのことを職員が共通理解し、授業のユニバーサルデザインを意識した授業づくりを再度見直していく必要がある。 ・ICTの活用がすすむにつれ、理解や定着に時間を要する生徒にとっては、学習内容の定着にも支援がいる。 ・特別支援教育推進委員会での内容を各学年や他学年の教師と情報共有して取り組む意識が低くなっている。	・授業のユニバーサルデザインを意識し、「誰にとってもわかりやすい授業」づくりを教師が意識して行う。 ・支援対象となる生徒が増加傾向にある。学年を問わず情報共有をし、サポートファイルの有無に関係なく学校全体で支援を行っていく。 ・授業のユニバーサルデザインについて研修を行う。	
読書活動の充実	・利用しやすい図書館づくりを行い、授業で活用することで学力向上を図る。 ・朝読書を活発化させ、活字を読み解く力の育成を図る。	・図書館だよりに生徒や保護者、図書ボランティアなどによる図書紹介コーナーを引き続き設け、より親しみやすい図書館づくりに役立っている。 ・最新の統計などの新しい資料を整備し、調べ学習に役立っている。	アンケート結果において「A」「B」評価の割合が85%以上を維持したい。	A	・全てのアンケート結果において「A」「B」評価の割合が85%を達成した。 ・新型コロナウイルス感染症対策により開館や利用に制限が多くなった。その中でもルールを守り、生徒の図書館利用は維持されている。 ・新しい図書館のルールを確立し、維持していく必要がある。	・図書委員と国語科を中心に図書館利用のマナーについて注意喚起を行う。 ・授業での図書室利用が现阶段では厳しい。教室に資料を持って行く等新しい利用の在り方を確立していく。	・振り返りは、生徒が主体的に取り組むしかけをお願いします。 ・授業での図書室利用が现阶段では厳しい。教室に資料を持って行く等新しい利用の在り方を確立していく。	

豊かな心・健やかな体（生徒指導部）	生徒指導の充実	<ul style="list-style-type: none"> 「笹ナビ」に基づき、教職員が連携して組織的な対応を行う。 いじめ防止などのための基本方針に基づき、保護者や関係機関との連携のもと、適正な対応を行う。 正しい情報提供を図り、家庭との連携に努める。 生徒自ら正しい判断をし、よりよい学校を創り上げていくための、自治の力を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校の教育方針や指導方針、いじめ基本方針などを教職員が熟知し、深く理解した上で、あらゆる機会を活用して、保護者をはじめ関係者にわかりやすく説明できるように、組織の一員としての自覚をもって職務に当たる。 学校のルールなどを、生徒会を中心として見直したり、あるいは新たに作ったりするなどの活動を活性化させる。 	<ul style="list-style-type: none"> アンケート結果において、「A」「B」評価の割合が80%以上になる。保護者と生徒両方のアンケートにおいてこれを達成したい。 不登校生徒数を10人以下にする。 全学級がQ-Uにおける学級満足度50%以上を目指す。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 生徒アンケートにおいて、いじめやトラブルへの対応については91.9%（平成31年度は89.9%）と上がっており、高い評価を得ている。保護者のアンケートでは同じ項目において、89.0%（平成31年度は83.0%）となっており、上がっている。迅速かつ丁寧に対応してきたことが成果に繋がっていると考えられる。職員アンケートにおいて、問題行動等に対して組織的に対応できる体制が整っているという項目に関しては、67%（平成31年度は73%）と下がっている。生徒の変化に応じた指導のシステムの見直しを図り、改善が必要である。 不登校生徒数については、昨年同時期とほぼ同じ数である。 Q-Uについては、学級満足度50%以下の学級があった。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒指導の「見える化」を図らなければならない。予測不能な社会の変化に適応し、様々な生徒の状況に合わせた指導の在り方を常に考え、システムを構築していく。 学年だけでなく、学校全体として報告、連絡、相談の徹底を図る。また、保護者へのきめ細やかな連絡を徹底する。 生徒会の活性化を図り、生徒の自主性を高める行事や授業づくりを個々の教員が意識する。 クラスの生徒の状況を的確に把握し、支援の必要な生徒には個別に対応するとともに、ルールとリレーションのバランスの取れた居心地のよい、まとまりのあるクラスづくりに努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 伊丹市全体では「不登校」の増加が見られるが、笹ナビでは、この対応がしっかりとできている。 家庭でのゲーム没入の防止→家庭（保護者）との連携（時間制限など）、毎日の家庭生活時間の点検などが必要。 命の大切さ、自転車の乗り方、スマホの活用などは、今後も生徒や保護者への啓発が必要である。 オンライン進路説明会なども、今後は検討していく必要があるかもしれない。 SSWを通じての小中連携が、今後はより一層必要かもしれない。
	進路指導の充実	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の将来を親身に考え、ひとりひとりに合った進路実現に向けた指導を行う。 正しい情報提供を図り、家庭との連携に努める。 	<ul style="list-style-type: none"> キャリアノートを活用し、自分の特性を見つめ、適切な進路を設計する力を養う。 トライやる・ウィークの取り組みを活用し、いろいろな職業があることを気づかせ、社会の一員になる意識付けを行う。 教育相談や三者懇談の時間などを生かして、生徒だけでなく保護者との対話時間も確保する。 1年生2年生は毎学期、定期的に進路学習を行い将来への見通しと進路に向けての意識付けを行い、希望を持たせる取り組みをする。 	<ul style="list-style-type: none"> アンケート結果において、「A」「B」評価の割合が80%以上を維持する。特に生徒・保護者アンケートにおいては「A」「B」評価が90%を超えており、本年度もこれを維持したい。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 進路指導の項目については、生徒のアンケートでは92.4%（前年度91.7%）だったが、保護者アンケートでは81.5%（前年度93.0%）と前年度を大幅に下回った。これは、コロナ禍の中で2年3学期と3年1学期の進路説明会が開催できなかったことが、おもな原因と思われる。そのような中でも81.5%を確保できたことは、こまめに進路通信で情報を発信していたからだと考えている。しかし、双方向の意思疎通ができたかという点、不十分であったことは否めない。そのため、三者懇談会や教育相談などの機会を生かして、個に応じた進路についての対話時間を引き続き確保していくことがより求められる。また、生徒だけでなく保護者にも進路情報を積極的に伝える努力や工夫を今後も行っていき必要性を感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> 感染症対策をしっかりとこなっていきながら従来通りの進路説明会を確保していく。 新生活様式の中で進路情報も刻々と変化していつている。進路情報を家庭まで確実に届けるためにプリントに保護者サイン欄をつくるなどの工夫を今後も継続していく。 学校における進路の取り組み内容や関連する活動を計画的に推進するとともに、保護者にも進路通信などを活用し、引き続き、積極的に情報を発信する意識を持って伝えていく。 	
	健康な体づくり	<ul style="list-style-type: none"> 心の健康の保持増進のため、体力の向上を図る。 食育や健康指導を通して、心身ともに、健康な体づくりを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 「自分の健康は自分で守る」という意識を高め、実行力を育むことを目指し、保体委員会をさらに活性化し、全校生徒に健康に関する情報を発信する機会を増やす。 病気や怪我の予防、食育など、健康増進に関する情報を掲示板や保健だよりなどで、引き続き広報する。 生徒への個別指導や保護者連絡をとりながら健康管理をすすめるなどの連携をとり、健康増進を目指した取り組みを推進する。 給食について、衛生面の指導、アレルギー対応を行う。 体力の向上につながる取り組みをする。 	<ul style="list-style-type: none"> アンケート結果において、「A」「B」評価の割合が85%以上になる。 保健だよりを定期的に発行する。 給食掲示を季節ごとに更新し、毎日の献立を掲示する。 全国体力調査において、全国平均を全ての項目で上回る。 	A	<ul style="list-style-type: none"> アンケート結果では、全ての項目で90%を超えた。 保健や家庭科の授業を通して、病気の予防や健康な体づくりなどの健康増進について生徒に啓発した。また、掲示板や保健だよりを通して、定期的に健康に関する情報を発信した。 保体委員会では、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、特に感染症対策について重点的に取り組んだ。 安心安全な給食実施に向けて、個人のアレルギー対応プランを作成し、家庭と学校が連携しながら、毎月のアレルギー対応を確認した。衛生面での指導の徹底や備品の充実について、今後も継続して進める。 残食はほとんどなく給食を食べることができ、毎日の献立を掲示することで給食に対する意識が高まった。 校内の体力調査では、昨年度の校内の記録と比較して、1・2年男女とも1～2ポイント全種目下がっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業を通して、健康に関する知識を習得するとともに、特に、スマホを使う時間や朝食を食べることなど、生活習慣について、学校と家庭が連携して健康管理について取り組みを行う。 自身の健康意識を高め、生徒の主体的な実行力を育てるため、委員会活動を活性化させる。 引き続き、掲示板、保健だよりなどを活用して、病気やけがの予防をはじめとする健康に関する情報を発信する。 学校給食を活用した食育に積極的に取り組む。 授業や部活動を通して、運動に取り組み、体力の向上につなげる。 	

開かれ信頼される学校（管理部・渉外部）	開かれた信頼される学校づくり（地域との連携）	<ul style="list-style-type: none"> 教職員の共通理解のもと、学校の教育方針や教育活動の周知徹底を図り、保護者や生徒の理解を深め、保護者や関係機関との連携のもと、組織的な対応を行う。 オープンスクールや参観日、行事などの機会を活用し、広く学校の教育活動を公開する。 コロナ禍において、感染症対策を取りながら、地域行事への積極的な参加を図るとともに、教職員と生徒、地域ボランティア等との連携により、可能な限りでのボランティア活動を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校の教育方針等を教職員が熟知し、保護者をはじめ関係者にわかりやすく説明できるように、組織の一員としての自覚をもって職務にあたる。 学校からの配布物が確実に各家庭に届き、情報が十分に伝わるように、終礼で必ず配布物の確認を行う。また、クリアファイルやクリップなどを活用し、保護者にその日のうちに必ず渡すことの習慣化を図る。 メール配信やHPを利用した情報発信に努める。 個人情報に配慮しながら、各種行事や講演会、部活動など、学校の様子をより具体的にわかるようHPの更新を行う。 学期に1回オープンスクールを実施し、授業参観とあわせて保護者や地域の方々により参加しやすい講演会や説明会などを企画する。 PTAやコミュニティスクールを中心に、学校支援ボランティアへの参加を促し、保護者や地域の方々との連携をすすめる。 生徒会を中心として、地域ボランティアの活性化を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒のアンケートにおいて地域活動に参加したいという項目の「A」「B」評価の割合が70%以上になる。 ホームページの月4回以上の更新、学校だよりの月1回以上の発行。 学期に1回オープンスクールを実施する。 学校の掲示物を随時更新する。 生徒のボランティア参加回数に応じて認定書を発行し、参加の意欲を持たせる。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 行事等の案内をコロナの感染状況に応じて配布するとともに、ミマモルメのメール配信の加入率は3年生は94%加入し、1・2年生も96%の加入率になった。 新型コロナウイルスの感染拡大に伴って、オープンスクール、講演会、地域のまつりやもちつき大会、校区内の幼稚園や小学校の行事への協力などの参加がかなわなかった。 地域の行事に参加したいという生徒の質問項目が、68.9%であったことから、行事の実施が可能になった場合は多くの生徒が参加したいということが見込まれる。 保護者による学校支援ボランティア（図書、園芸、土曜学習）の活動が定着し、その内容もより充実してきた。 学校運営協議会の内容を教職員に周知し、改善につなげることができた。 学校だよりや学年通信等、月1回以上の定期的な発行・配布、写真や生徒・保護者の感想等を多く掲載するなど工夫できた。 CSディレクターの配置により、毎月5～6回以上のHPの更新及び内容の充実を十分に図ることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校だよりや学年だよりで学校のことがよくわかるという生徒の割合が昨年91.0%だったのが、今年度は94.6%に伸びた。90%以上を達成したので、今後も継続していきたい。 学校の教育方針等を教職員が熟知し、引き続きあらゆる機会を活用して、保護者をはじめ関係者にわかりやすく説明していく。 これまでの地域へのボランティア活動を可能な限り引き続き推進する。 参加型地域学習などの企画を、生徒会中心に行う。（笹フェス継続を検討） 教職員の負担軽減のため、地域からの依頼事項を考慮していく。 個人情報に配慮しながら、各種行事や講演会、部活動など、学校の様子がより具体的にわかるようタイムリーにHPの更新と啓発につとめる。 HPの更新を毎月5～6回以上は行っていく。 学校運営協議会委員やCSディレクターを通じて学校の情報を、地域や保護者へHPやコミュニティスクールだよりなどを通じて積極的に発信していくとともに、コロナ禍での参加方法を考える。 ボランティアマスターの認定を今後も継続していきたい。 ICTを利用するなど、新しい学校教育活動の公開方法を考えていく。 	<ul style="list-style-type: none"> コロナの影響で、地域とのつながりが止まったことが危惧される。逆に、地域やボランティアが学校にどう関わるかも課題。 地域と連携した防災の取組は今後必要である。 生徒が自主的にボランティアに行けるシステムがあってもいい。 学校だより、学年通信、保健だよりなど、定期的に情報発信があり、学校の様子がよくわかる。 ICTを活用したつながり方を検討してもいいかもしれない。 →学校と保護者、学校と生徒、小学校と中学校など。 校舎がきれいになったので、これからは、清掃などのソフト面で美しさを継続してほしい。
	教育環境の整備	<ul style="list-style-type: none"> 清掃活動を活性化し、教育環境を整える。 安全点検を徹底し、安全・安心な学校づくりを進める。 	<ul style="list-style-type: none"> 美化委員を中心として清掃用具の整備を行う。 安全点検を実施するための時間を確保する。 「もくもく清掃」に取り組む。 大規模改修により、改善された学校環境をきれいな状態に保つ。 	<ul style="list-style-type: none"> アンケート結果すべての項目において、「A」「B」評価の割合が85%以上になるよう維持する。 月1回、清掃用具の配置状況を点検する。 週1回、清掃状況を点検する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 前々年度と同じく、大規模改修により校舎が綺麗になった影響もあり、生徒達が綺麗に施設や用具を使用する意識が高まり、アンケートでも生徒・保護者ともに、90%以上が良い評価をつけた。また、最も高い評価の割合が大きくなった。 「もくもく清掃(無言清掃)」が定着し、静かに行うことができています。 安全点検の声かけは職階連絡等で確実に行われていた。 清掃用具箱の中の掃除用具チェックが月1回が行われなかった。大清掃などがある際に限られていた。 コロナ禍の中、開始時期の遅れはあったが、美化委員で朝の掃除や落ち葉拾いを行ったが期間が短すぎた。また、今年度は中止になったトライやるウィークの代替として、公園の落ち葉拾いなどを行った。その活動が評価されたのが、教師からの評価が大きかった。 清掃状況の点検は、2月にまとめとして行ったのみだった。 「もくもく清掃(無言清掃)」が新入生にも定着し、文化となったが、掃除場所によってはしゃべってしまったり、守れていない生徒もいた。 大規模改修により新しくなった校舎をなるべくきれいな状態で使い続けなければならない。理科室などは新しい素材で床が張られており、改修前の掃除方法そのままでは効果が低い場合があるので、掃除方法の見直しが必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 美化委員を中心として、月1回の掃除用具の点検活動を行う。 月1回の安全点検を呼びかけ、教員の点検漏れがないかを分かりやすくするために、紙でのチェックからデータ入力へと変更したので、係りから各学年への遅かったデータ入力の声かけをこれからも徹底する。 「もくもく清掃(無言清掃)」時に喋ってしまう生徒への注意を美化委員にさせる。見回り、チェックシートにもくもく清掃の状況を記入し、終礼で発表する。 朝の清掃活動や落ち葉拾いはボランティアや部活動と連携してする。 	

学校関係者評価総括
○生徒・保護者ともに全体的に評価が上がっており、コロナ禍での先生方の頑張りや敬意を表します。今後もこの評価を落とさないよう取組の継続を望みます。
○今年度はコロナ禍による生徒や学校現場の人的・物的影響が大きかった。
1. 3年生の進路に対する心配や懸念(この対応で、教員の努力や負担が大きかった)
2. 2年生の部活動活動量の減少による将来への不安(エネルギーの発散ができなかった → このエネルギーはどこへ?)
3. 1年生の長期休業による人間関係作りの不安(通常の様子では対応できない、また、教員からの支援が大きく、不可欠)

次年度に向けた重点的な改善点
1. 新3年生への**進路指導**：「進路指導」とは、「高校などの紹介」ばかりではなく、①「生まれてから今まで何を継続的にやってきたのか」②「自分が一番得意とするものは何か」を、本人(生徒)に自覚させ、それを活かすためには「どうしたらいいのか」を考えさせる指導
2. 新2年生への人間関係作り：感染防止教育、いじめ防止、友だちづくり、**進路指導**
3. 新1年生へのコロナ禍での対応のあり方：感染防止教育、いじめ防止、友だちづくり、**進路指導**